



SPRING GEIL 2016 Jチーム政策案 Word 資料

育成する人材・能力とその理由

☆課題設定&突破力。

主体的に課題を発見し論理的に思考することで自分の意見を形成し、さらにその知識を応用する力。

→課題設定突破力を選定した理由…上記の課題設定突破力は、どのような社会変化が起ころうともすべての人が大人になり社会に出ていくときに身に付けておくべき、不変かつ最低限の力であるから。

+課題設定突破力は企業が求める能力上位に位置するにもかかわらず、若者にこのような能力が身に付いていないという、人材のミスマッチもあるから。

この能力は日本国民全員に等しく身に付ける機会が与えられるべきなので、就学前段階から中等教育段階までで、この能力を育成する必要がある。

社会人基礎力

☆課題設定&突破力は、学習指導要領には書かれているが実際それを育成するような実効性のある教育が為されていないのが問題。つまりゼロベースで考えていくことを基本とする。

その前に課題設定突破力を育成するにあたって、その阻害要因となるのはどこなのであろうかを確定する。

・社会人基礎力を教えることができるようになる指導能力を身に付ける時間がないという点から、先生が忙しすぎること。

→原因…部活動の指導時間が長い。根拠…部活動にかかる時間が一週間7.7時間と長い。

事務の時間が多すぎる。根拠…事務作業一週間5.5時間と長い。

・生徒に知識を与えるのは先生だという観点から、課題設定突破力を指導できる先生がいないこと。

→原因…教育指導法が定まっていないから。

では手法考案に移る。

目標…①先生の忙しさを解消し、②課題設定突破力を指導できる先生の養成。③先生が課題設定突破力を子供に身に付けさせる教育を実行する。

①先生の忙しきの改革

・部活動についての改革

学校・保護者・社会人指導者の連携で、部活動の顧問を務める。平日は教員の指導、休日は保護者クラブ(保護者が運営主体となっているもの)や社会人指導者の指導。このとき指導者は登録制にして、教員も休日もやりたい場合は登録可能とする。任期は1年。毎年度更新。これにより教員の負担軽減が達成できる。

・事務作業についての改革

事務作業をつかさどる「教職事務」を作り、教員の負担を減らす。教職事務とは成績処理、報告書作成、名簿作成などを行うこと。また先生側と職員間の情報交換、秘匿性が確実となるような仕組みを作る。

②課題設定突&破力を指導できる先生の養成



教員養成機関(高等教育段階)は、小学校教諭になるためには4年間。中学・高校教諭になるためには6年間。

新任の教員の養成は、アクティブラーニングの意義を正確に理解し、それを利用できる教育法を教職課程で身に着ける。その教育法を実際実践する機会を設ける。まず、座学の知識を利用して教員間でのワークショップを複数回開催し練習を積む。その後、その成果を活かしながら少なくとも2回教育現場で教育法を実践する。

既存の教員の養成は、研修で能力を身に着ける。研修の内容として、独立行政法人教員研修センターが課題設定突破力を身に着けられるようなカリキュラムを作成する。その方法として、新しい教職課程を受けている学生(課題設定突破力を学んでいる)と当該教員(課題設定突破力を学んでいない)を同時に学ばせることで、両者得。学生は現場の声を知ることができ、当該職員は課題設定突破力を学んでいる学生とカリキュラム双方から課題設定突破力をまなぶことができる。

③課題設定突破力を子供に身に着けさせるための教育を形作る

・小学校

総合の時間に組み込む。総合の時間は小学校で70時間/1年(小3から)である。小学校の間に身に着けるべき能力は課題設定突破力の基礎になる要素である。方法としては、自らの興味分野に対して主体性をもって課題を設定し調べ学習などをするというものである。その時、司書教諭による図書館での情報収集の手段やPCの基本的な使い方に関する授業を行うことで課題設定突破力の養成を強化する。

・中学校

総合の時間に組み込む。総合の時間は中学校で50時間/1年(中1から)である。中学校の間に身に着けるべき能力は課題設定突破力の基礎と、応用の橋渡し(意見を論理的に発信し情報を適切に処理する)になるものである。方法としては、ディベートやプレゼンテーションなどが挙げられる。

・高校

総合・情報の時間に組み込む(週1で1時間)。高校で身に着けるべき能力は主体的に課題を設定し、論理的にその分野について発信できる能力である。情報ツールを通して、論文など生徒がやりたいより高度な内容を授業として展開する。



Policy making contest for students

--